

第1章 中宮寺天寿国繡帳と『法華経』

第1節 天寿国の研究史

本章では、奈良斑鳩の中宮寺所蔵の国宝天寿国繡帳について、残された繡帳の断片と、多くの先達が種々検討された内容を吟味し、問題を整理しながら、断片に見える図像についてその主題を考察してみようと思う。

現在天寿国繡帳は上中下3段、各左右の全6景に分かれている(図3-1.3.6.9.10.12)。記録は『上宮聖徳法王帝説』(以下『法王帝説』という)の「右、法隆寺の蔵に在りし繡帳二張、亀の背上に文字を縫い付けしものなり」¹がもっとも古く『法隆寺伽藍縁起並資財帳』(以下『資財帳』という)の「合通分、繡帳式帳 其帯廿二条 鈴三百九十三、右、浄御原宮御宇天皇の納め 賜ひしものなり」²が、鎌倉時代に発見されたことを記す『聖誉鈔』の「夢ニ見進セシ万ダラ、鈴付タリシカ」³の記事に符合し、当繡帳のこととされている。

『資財帳』中の浄御原宮御宇天皇を天武天皇とすると、その治政(672-686)の白鳳時代に法隆寺へ納入されたと理解されるが、ふつう『資財帳』作成時の天平19(747)年(翌年完成)を旧繡帳の確かな存在時期としている。

『法王帝説』と宮内庁書陵部所蔵の『中宮寺尼信如祈請等事』には、亀甲上に4字ずつ記された銘文が記録されている⁴。内容は、辛巳(621)年に太子の母穴穂部間人王が亡くなり、翌年太子も薨去され、悲嘆にくれた妃橘大女郎が、太子の往生した天寿国を偲び推古天皇に奏上して、采女たちに繡造させたとある。当否は別として、この推古朝の飛鳥時代が、本繡帳作成時期の上限である。

その後、鎌倉時代の文永11(1274)年、中宮寺の尼信如により法隆寺から旧繡帳が発見され、京都靈山寺の天台僧定円に依頼し、銘文の読解と新繡帳の作成がおこなわれた。これが建治元(1275)年のことである⁵。

現在遺存する天寿国繡帳は、この新旧双方の断片が混在しており、染色の問題で、色の褪せた方が新繡帳の鎌倉期とされている⁶。

¹ 狩谷望之証註『上宮聖徳法王帝説』(『群書類従』1893,4 輯巻 64,『大日本仏教全書』112,聖徳太子伝叢書,仏書刊行会,1912,p.43~48)。

² 正しくは行信等『法隆寺伽藍縁起並流記資財帳』天平20(748)年(『大日本仏教全書』117 寺誌叢書 1,仏書刊行会,1913,p.1-26)。

³ 聖誉『聖誉鈔』応永 13(1406)年頃(『大日本仏教全書』112 聖徳太子伝叢書,仏書刊行会 1912,p.483)。

⁴ 諸研究を経て、今日に至った銘文の紹介は大橋一章,後掲注7 著書,p.145にある。

⁵ 定円『太子曼荼羅講式』(石田茂作編『聖徳太子全集』4,初版は龍吟社,1942-1944,臨川書店,1988,p.13)の奥付に「建治元年秋八月,新奉繡天寿国曼荼羅云々」とある記録による。

⁶ 太田英蔵「天寿国曼荼羅の繡技と建治修理について」(『史跡と美術』188,1943)。

天寿国繡帳に描かれた天寿国とは、一体どのような浄土をさしているのでしょうか。これまで多くの先達はその解明に心血を注いでいるが、ここではその大勢を知るため、大橋一章氏の労作をもとに、各説のポイントをあげて、問題点を明らかにしてみよう⁷。

1. 極楽浄土説

これは西方極楽浄土が『無量寿経』に説かれ、その国土を無量寿国ともいうので、無量寿国と天寿国の文字の類似性で古くから同一説が出されて、今日に至っている⁸。またこれは鎌倉時代に新繡帳が作成された時、すでに無量寿国と理解されていたことも強みであった⁹。そして、隋代の『華嚴経』奥書に「願わくは亡き父母、西方天寿国に託生し、常に正法を聞かん」とあることが知られ、経典に見られない「天寿国」が示されて、この説が補強された¹⁰。

しかし、この経典が浄土経典でなく『華嚴経』であること、また6世紀の中国の造像銘には「西方妙喜世界」あるいは「西方妙楽国土」など、西方とはあるが、妙喜浄土とすれば維摩詰が知られ、妙楽浄土でははっきりしないこと。また、女性を描く繡帳は、女人を絶すといわれる西方極楽浄土には該当しないという問題が残されている¹¹。

2. 妙喜浄土説

これは三経義疏の中に維摩経が含まれていて聖徳太子が有髮妻帯の求道者であることからこの維摩居士に結びつき、その妙喜浄土としたことによる¹²。けれども、当初『維摩義疏』を三経義疏の第一としたことに問題があり、維摩、勝鬘、法華の順で評価が高いと批判されている¹³。したがって、この妙喜浄土であるとする積極的な裏づけは見出せない。

3. 兜率浄土説

聖徳太子時代までの大陸の信仰を考察し、当時西方往生と兜率往生の2つが主流であり、中宮寺の本尊が弥勒の半跏思惟像であること。そして、繡帳に月兔の図が描かれていることから、これを天上界とし兜率天にあてる¹⁴。が、無量寿国の仏陀の無限の寿命に対して、天上界の寿命は有限で、極楽浄土に劣るとの批判がある¹⁵。

⁷ 大橋一章『天寿国繡帳の研究』(吉川弘文館,1995)。

⁸ 平子鐸領『補校上宮聖徳法王帝説証注』(丙子出版社,1913)、家永三郎『上代仏教思想史研究』(目黒書店,1950,新訂版は1966 法蔵館)、大橋一章『聖徳太子への鎮魂—天寿国繡帳残照—』(グラフ社,1987)など。

⁹ 定円『太子曼荼羅講式』(上掲注5)。

¹⁰ 常盤大定「天寿国について」(『支那仏教の研究』春秋社,1938)。

¹¹ 家永三郎,上掲注8 著書,p.60~69、重松明久『日本浄土教成立過程の研究』(平楽寺書店,1971,p.77)。

¹² 大矢透『仮名源流考』(国定教科書共同販売所,1911)。

¹³ 大野達之助,下掲注22 著書,p.70。

¹⁴ 辻善之助「聖徳太子の信仰と天寿国曼荼羅」(『聖徳太子論纂』平安考古会,1955)、福井康順「天寿国曼荼羅の思想的性格」(『東洋思想の研究』理想社,1928)。

¹⁵ 大橋一章,上掲注7 著書,p.160。

4. 靈山浄土説

聖徳太子が『法華経』を講じ、これを諸経中第一と考えていたことから、その靈山浄土とする¹⁶。法隆寺金堂の本尊が太子等身の釈迦像で、脇士も法華経に説く薬王、薬上と伝えているという裏づけを持つが、それ以上の追求がなされていない。その後、十方浄土説を是認する方向へ傾いていった。

5. 十方浄土の理想境説

聖徳太子当時の浄土信仰では明瞭な概念を得ていなかったとし、浄土を特定しない十方浄土を主張する¹⁷。あるいは、中国的神仙境の入ったものとし、仏教からやや離れて考察する¹⁸。しかし、太子が『法華義疏』で『無量寿経』に言及している点から、浄土は不明瞭ではなかったとする批判がある¹⁹。また随方毘尼という各地域の風俗に一部従う考えが仏教にはある²⁰。

6. 此土の天竺国説

この説は『太子伝記』²¹に初出し、天寿と天竺が古音で結びつくこと考証して提出された²²。が、その後の使用例がほとんどないという批判がなされている²³。

さて、天寿国についての以上の6説の中で1つを選ぶとすれば、阿弥陀仏の西方浄土か、弥勒仏の兜率浄土か、この2者のいずれかであって、前者の方が有力視されている²⁴。しかし、いずれかに絞れば問題の解決が図られるとは思えない。むしろ、両者を含め全体を合わせて考えたら如何であろうか。

さいわい、阿弥陀仏も弥勒仏もともに載せる経典として、我々は『法華経』を見出すことができる。すなわち『法華経』薬王品第23では、当品を聞法し『法華経』を修行する女人は、命終ののち阿弥陀仏の安楽世界へ往生すると述べている。また、同普賢品第28では『法華経』受持者が、説のごとく修行すれば、命終ののち兜率天上の弥勒仏の下へ往生すると述べている。つまり『法華経』受持者にとっては、阿弥陀仏の安楽世界も、弥勒仏の兜率浄土も命終後に自在に遊戯する世界であったことが知られる²⁵。

したがって、このように『法華経』で全体を包含して考えた場合、聖徳太子や橘大女郎の

¹⁶ 大屋徳城「天寿国繡帳攷」二下(『宗教研究』新54-5,同文館1928)。

¹⁷ 内藤藤一郎『日本仏教絵画史一飛鳥編』(政経書院,1935)。

¹⁸ 望月信成「天寿国繡帳の再考」(『日本上代文化の研究一聖徳太子奉讃論文集』法隆寺,1941), 林幹哉「聖徳太子と神仙神話」(『国史学』53,1950)。

¹⁹ 家永三郎,上掲注8 著書,p.16。

²⁰ 随方毘尼の毘尼は戒律のこと。唐・道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』(『大正蔵』40,1927,p.1c)。

²¹ 藤原猶雪校編『聖徳太子伝記』(『聖徳太子全集』2,上掲注5,p.443)。

²² 大野達之助『聖徳太子の研究』(吉川弘文館,1970)。

²³ 大橋一章,上掲注7 著書,p.151。

²⁴ 同上注7,p.160。

²⁵ 後秦・鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』(『大正蔵』9,1925,p.54,61)。

当時の状況や願いが無理なく理解されるように思われる。

第2節 天寿国繡帳と『法華経』

天寿国繡帳と『法華経』の関係は、鎌倉時代の文永11(1274)年、中宮寺の尼信如が、法隆寺の綱封蔵で発見した旧繡帳を解説のため送り届けた相手先が、天台宗園城寺権大僧都定円であったこと——天台宗における所依の經典が『法華経』であること——に象徴的に示されている²⁶。

僧定円は、新繡帳の完成をみて、建治2年に起草した『太子曼荼羅講式』(以下『講式』という)で、太子の本迹を「日本能化上宮王、我身は救世観音、妙法を開演し衆生を度す」と述べている。これは救世観音が『法華経』の観音品の偈の「観音妙智力、能救世間苦」に由来し、妙法が『妙法蓮華経』と結びつくので、結局太子が観音の化身として『法華経』を弘めたという意味であることが理解される。

『講式』ではさらに敷衍して、曼荼羅の功德が「約理において常寂光土、約事において極楽浄土変相」であるとし、そして太子と妃を「観音と勢至」の2脇士、太子の母を本尊「阿弥陀如来」としている。恐らくこれは中宮寺の尼信如が、寺の発願主を太子の母間人皇后と定めて、皇后を阿弥陀の化身と信じていたことによるのであろうが、これが天寿国繡帳を阿弥陀浄土の曼荼羅であるとする説の発生源であろう。

しかし『講式』をさらに検討してみると、母間人皇后は本地西方阿弥陀如来であるが、衆生済度の慈悲心に促され、此土の娑婆世界へ交わることになったとのべ、その土は極楽のごとくであるが、中天竺坤方の天寿国で、ここへ太子も必ず来るとする。とすると、太子の往生の地は、この時点では明らかに西方阿弥陀浄土ではないということである。

では、繡帳についてこの『講式』でいう、太子一期の利生方便や滅後の生所天寿国の依正の莊嚴とは、一体どのような背景を想定すればいいのであろうか。一つの見方として、『講式』や『太子伝記』で使われている仏教用語に、法華信仰の関係語が多い点を注意したいと思う。

たとえば、前者では「十界」「常楽我浄」「依正」「分段変易」。後者では「妙法の理」「利他の事」などがある。「十界」は、古くは『大智度論』にあり、天台の『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』で理論的に体系化されている。「常楽我浄」これは四徳波羅蜜とよばれ『涅槃経』および『普賢経』にあり『法華玄義』でとりあげている。「依正」は『法華玄義』および同『釈籤』にあり、「分段変易」は『法華玄義』でとりあげている。「妙法の理」は『法華玄義』にあり、単なる正法でなく妙法とあることが注目される。「利他の事」は『法

²⁶ 上掲注5,定円『太子曼荼羅講式』。

華文句』にある²⁷。

つぎに、新繡帳完成後、定円の住する京都の靈山寺で行われた法要について『聖徳太子伝記』は、「その後、両院、靈山において定円法印を道師となして法華三十講を行ぜらる」とのべている。法華三十講とは『法華経』28品の各品を1講として開結2経を加えて合計30講として行う講経の法会のことである。

この法会でなぜ法華三十講を行ったかを注意する必要がある。これが平安から鎌倉時代へかけてひろまる法華の浄土信仰の流れであるが、これを単なる時代の流行として皮相的にみることには正しくないであろう。法会の中心に作成された新繡帳を掲げているので、繡帳の内容もこの法華三十講と関係がないと思えないからである。

今日の繡帳は、新旧両繡帳の合成という状態でわずかに断片が存在する。また図像の様式的特徴において、ここに飛鳥、奈良時代の旧繡帳片を含むとされているので²⁸、平安時代から鎌倉時代へかけて発達した阿弥陀の念仏信仰に関して作成された新繡帳の中にも、旧繡帳に通ずる何かがあったはずである。つまり、太子の時代にすでに『法華経』が説かれ、平安時代から鎌倉時代へかけて、これが一貫して継続したというのであれば、その何かとは恐らく『法華経』に関するものではないかということになる。

すなわち、かつて大屋徳城氏がのべた、「王妃以下の眼に映じた太子欣求の浄土は 釈尊の浄土、即ち法華所説の久遠の浄刹であったことは寸毫の疑ひを容れぬ²⁹」との確信は『法華経』に説く浄土という意味で、恐らく当たっていると思われる。したがって、つぎの課題はこの更なる追求ということである。

第3節 天寿国繡帳の図像

1. 上段右部分 (図3-1)

まず、中央の蓮華から化生する像(8)が目に入る。——このように蓮華上に化生する像は、繡帳全体ではあわせて4体(8,27,40,48)ある。——ここではこの像が最も大きく描かれているので、この像が画面の中心的役割を果たしていることが知られる。頭上に冠があり、上半身が裸であるとの指摘からみて³⁰、菩薩像と理解される。法隆寺48体仏の中に、これと似た、子房が見えて立蓮華上に立つ観音菩薩像がある(図3-2)。頭冠に化仏をつけるので観音像

²⁷ 十界...『大智度論』27(『大正蔵』25,p.257c~258a), 『法華玄義』2 上(『大正蔵』33,p. 693 c), 『法華文句』1 下(『大正蔵』34,p.9b), 『摩訶止観』5 上,8 下(『大正蔵』46,p.52b,54a,113c), 常楽我浄...『大般涅槃経』25(『大正蔵』12,p.510b), 『観普賢菩薩行法経』(『大正蔵』9,p.392c), 『法華玄義』4 上(『大正蔵』33,p.721c), 依正...『法華玄義』7(『大正蔵』33,p.773h), 分段変易...『法華玄義』6 下(『大正蔵』33,p.756a), 妙法の理...『法華玄義』8 上(『大正蔵』33,p.775a), 利他の事...『法華文句』8 上(『大正蔵』34,p.108a)。

²⁸ 上掲注7,大橋著書 p.12~14。

²⁹ 上掲注16,大屋論文,下 p.81。

³⁰ 上掲注7,大橋著書,p.32。

と特定できるが、繡帳の像は頭冠部に化仏がない。したがって、像の特定はできないが、胸にみえるU字形の跡は纓絡らしいので、菩薩像の1つとしていいであろう。この像の左右にみえる在俗の人々(5,13,16)については、この像と直接結びつく様子に見えないので、後で考えてみることにしたい。

つぎに、右下の蓮華を持ち供養する男子像2体(7,4)が見える。2人は華上の像に対して礼拝に馳せ参じている様子にみえる。本図の左下部に、連珠文と宝珠文のついた折れ曲がる部分(18)がある。これは本図が繡帳の左下端部に位置することを示しているという³¹。以上の点を『法華経』にあてはめてみよう。図が全体の末部らしいことと、普賢品が経典末部にあたる関係から当てはめてみると興味深い。普賢品の本文では如来滅後に法華経を受持、読誦し、その義趣を解する人は、命終ののち兜率天上の弥勒菩薩の下に往くといひ、受持、読誦までの人は、天人大衆の中で獅子の法座に坐すと述べている³²。図中央の蓮華華上の菩薩(8)とその下の華上の人(10)を弥勒菩薩とその関係者とし、図右方の人々の集まり(2,3,6,4)と下の騎乗の人(7)を獅子に坐す人と見れば、この普賢品の一部を図示していることになる。

2. 上段左部分 (図 3-3)

この部分で一番目につくのは月の図(31)である。『法華経』では薬王品で月に言及している。すなわち「衆星の中に月天子最もそれ第一なるがごとく、此の『法華経』もまたまた是くの如し」とあり、過去に臂を焼いて仏塔を供養したのは日月浄明德仏の法のなかで苦行した一切衆生喜見菩薩であり、それは今の薬王菩薩であるとのべる³³。

本図の中央で蓮華上に化生する像(27)は、頭冠をつけた着衣の様子から、この薬王菩薩であろう。法隆寺では金堂本尊の脇士を、寺伝で薬王、薬上に比定する(図 3-4)³⁴。大きな子房の上に立つ2菩薩の様子は、48体仏以上にこの化生像に類似している。また、この像の左右に立上がる赤い蓮弁は、炎が立つようでもあり、これが臂を焼く話に結びつく可能性もあるであろう。

薬王品後半で、もし女人がこの品を聞き受持すれば、女人として生まれ変わることなく、安楽世界の菩薩衆に囲まれた阿弥陀仏のいる蓮華の宝座上に生まれると説く³⁵。この図で

³¹ 上掲注 7,p.34。

³² 上掲注 25,本文は次の通り。(『大正蔵』9,p.61c~62a)「若有人受持読誦,解其義趣,是人命終,為千仏授手,令不恐怖,不墮惡趣。即往兜率天上,弥勒菩薩所,弥勒菩薩有三十二相,大菩薩衆,所共圍繞有百千万億天女眷屬,而於中生。(中略)普賢若如来滅後後五百歳,若有人見受持読誦,法華経者,応作是念,此人不久当詣道場,破諸魔衆,得阿耨多羅三藐三菩提,転法輪撃法鼓,吹法螺,雨法雨,当坐天人大衆中師子法座上」の文。

³³ 同上掲注 25(『大正蔵』9,p.54a)。

³⁴ 顕真『太子伝私記』建長元(1249)年(『大日本仏教全書』112,上掲注 1,p.97), 覚賢『斑鳩古寺便覧』,嘉元 3(1305)年,本尊部(『大日本仏教全書』117,上掲注 2,p.59)など。

³⁵ 上掲注 25,本文は次の通り。(『大正蔵』9,p.54b-c)「若如来滅後後五百歳中,若有女人,聞是経

は阿弥陀仏の描かれた様子は見えないが、12世紀南宋時代では「版本細字法華経」の見返絵に、阿弥陀仏の来迎と弥勒仏の内院が描かれている(図3-5)。したがって、上記ですでに弥勒菩薩が示されているので、阿弥陀仏の光景も鎌倉時代を中心に考えた場合はすでに描かれていたのかもしれない。

右上の鳳凰に似た鳥(20)と、化生像左右の4文字入りの亀甲の亀(26)は、それぞれ法師功德品と妙莊嚴王品に關係語がみえる。前者では、法華経を受持する善男子、善女人の耳根が、山川陰谷にいる最も美しい声の迦陵頻伽鳥や、命命鳥の声を聞き分けることができるとあり³⁶、後者では、妙莊嚴王と浄徳夫人に言上する2人の子、浄蔵、浄眼(薬王、薬上)が出家の許された喜びを語り、仏に値う難しさは、一眼の亀が浮木の孔に値(あ)えるが如しとのべている³⁷。いずれも『法華経』品々で取り上げている点が興味深い。

3. 中段右部分 (図3-6)

ここには亀甲を挟んで化生の菩薩が2体(48,40)描かれている。左は頭部無冠の像で右は有髪の像である。ただ両者の形態はほとんど同一で、左は頭髪部が切れてしまったらしく、共に菩薩の像の可能性が高い。もし2菩薩がペアーで描かれたとすると、妙莊嚴王品の2人の子(薬王、薬上)の物語としてみる事ができる。すなわち、妙莊嚴王の2子が父の出家のために現じた神変(身上出水、身下出水、身上出火、身下出水)の様子で、両像の右脇に立ち上がる帯状片は青色に染められているので、単なる天衣というよりも神変の出水の様子であろうか。また、左の像の足下の蓮華から右上に立ち上がる赤い葉片(50)は出火の神変を示すのであろう³⁸。

つぎに、左の像の下方で跪拝する3人(56,57,47)がみえる。妙莊嚴王品では、妙莊嚴王が夫人や2子とともに仏所に詣でて頭面に仏陀の足を礼し、仏を遶ること3帀とあり、図はこの仕草にあてはまる³⁹。

右端の大きな青蓮華(41)は『法華経』でしばしば取り上げられている。たとえば、妙音品では「この菩薩の目は広大な青蓮華のごとし」とあり、薬王品では「まさに青蓮華をもって沫香を盛り満ててその上に供散すべし」とか「この人現世に常に青蓮華の香りを出す」などとある⁴⁰。図の青蓮華がどの品に当たるかは難しいが、『法華経』における関係性の深さは理解できるであろう。

典,如説修行,於此命終,即往安樂世界阿弥陀仏,大菩薩衆,圍綾住处,生蓮華中,宝座之上」の文。

³⁶ 上掲注 25,『大正蔵』9,p.48a。

³⁷ 同上掲注 25,p.60a-b。

³⁸ 同上掲注 25,p.60a。本図の左上の葉片(52)もこれの一片とする見解がある(上掲注 7,大橋著書, p.42)。

³⁹ 同上掲注 25,p.60b。図の礼拝の対象は菩薩と思われるので、仏陀を礼拝するという本文には一致しない。図の上下が切れているか、あるいはこの種の礼拝の文は、ほかに薬王品(同 p.53c)や妙音品(同 p.55c)にもあるので、必ずしも妙莊嚴王品に限らないというべきであろうか。

⁴⁰ 同上掲注 25,p.55c,p.54c。

つぎに、課題であった本図に見える在俗の人物像について一部考えてみよう。図の両側で肩から襷を掛ける女性像(43,53,55)は、群馬県出土の古墳時代後期(6世紀)の埴輪の中に類例の襷を掛ける像がいくつかある(図3-7)。説明では襲(おすい)をつける巫女とあり、『古事記』と『万葉集』に歌がある⁴¹。したがって、これらの像はおそらく在俗の女性、すなわち太子を囲む夫人や女子であり、太子の往生を見守る祭祀的な風俗を表しているのであろう。

4. 中段左部分 (図3-8)

図の中央に坐す金剛杵を持つ執金剛神(65)が中心とみて、典拠を求めると、観音品で観音が衆生を済度するため33身に変身する、その最後が執金剛神であることがわかる⁴²。敦煌の盛唐期の壁画、第45窟に、観音の33身の各場面を描き、中央に大きく観音像の立つ図がある(図3-9)ので、本図も執金剛神の右上下に大きな蓮華とその上に立つ像らしき断片から見て、ここに巨大な観音の像があったのかもしれない。

執金剛神の下に水と波の造形(66)がみえる。これを観音品でみると、人が大海で黒風に遭い羅刹国に飄墮する災難で、観音の名号を唱えて救われる話がある⁴³。おそらくこの海と波を表したのであろう。左上方には3比丘(63)と香炉(64)が描かれている。香炉に注意してみると、該当品として、清浄の鼻根の功德を説く法師功德品があり、つぎのようにいう。「諸の比丘衆等の法において常に精進し、若しくは坐し、経行しおよび経法を誦誦し、あるいは林樹の下にあつて、専精に座禅する持経者は、香を聞いて悉くその所在を知らん」⁴⁴。図の3比丘のうち左2人が座禅の姿であり、右端は経巻を持っている。おそらく彼らは下の香炉から上がる名香を聞き分けているのであろう。

香炉左上の女性(67)は2人を繋ぎ合わせたものというが、腹部の様子では懐妊したようにも見える。じつは、この法師功德品の前半では、女性が初めて懐妊した時、香を聞く功德により安楽に福子を生むことができるとある⁴⁵。また、上記の観音品では、子供を欲しいと願う女性は、観音の功德力で立派な男女を授かるとの記述がある⁴⁶。とすると、在俗女性信仰者の多い本繡帳は、あるいは女性をテーマにして理解することも必要であろうか。

5. 下段右部分 (図3-10)

ここでは鐘(75)をつく僧(74)と戸外で蓑を着て歩む3人の人物(77,78,79)が注目される。『法華経』提婆品では、前半で過去に国王となって仙人に法を求める釈尊と、その仙人が国

⁴¹ 『古事記』上大国主神、歌謡2に「太刀が緒も、いまだ解かずて、漣須比をも、いまだ解かねば」とあり、『万葉集』3・379に「膝折り伏せて、手弱女の、押日取りかけ、かくだにも」とある。

⁴² 上掲注25、『大正蔵』9,p.57b。

⁴³ 同上掲注25,p.56c。

⁴⁴ 同上掲注25,p.49b,「諸比丘衆等、於法常精進、若坐若経行、及誦誦経法、或在林樹下、専精而坐禅、持経者聞香、悉知其所在」の文。

⁴⁵ 同上掲注25,p.49a。

⁴⁶ 同上掲注25,p.57a。

王に『法華經』を授ける物語がある。偈の文は次のようにいう。

「我過去の劫を念うに、大法を求むるをもつての故に、世の国王と^な作れりと雖も、五欲の樂を貪らざりき。鐘を^つ椎いて四方に告ぐ、誰か大法を有てる者なる、もし我がために解説せば、身当に奴僕となるべし」⁴⁷

図の建物の中で鐘を撞く1人の僧(74)が見える。これが法を求めて王位を捨てた国王の出家の姿であろうか。そして、偈はつぎのように続ける。

「時に阿私仙あり。来たりて大王に^も白さく、我微妙の法を^た有てり。世間に希有なる所なり。もしよく修行せば、吾まさに汝がために説くべし。時に王、仙の言を聞いて、心に大喜悅を生じ、すなわち仙人に随つて所須を供給し、薪および果瓜を採つて、時に随つて恭敬して与えき」⁴⁸

建物の左に杖を突き、蓑を着て山に入る仙人(78)と、求法に燃えてその後続く国王(79)の2人の姿が見える。そして、その左上の人物(77)が薪や果瓜を採りに山へ入る国王であろうか。時代は下るが、この提婆品に基づいて、仙人に従つて修行に励む国王の姿を描く図がある。京都立本寺にある鎌倉時代中期とされる「法華經金字宝塔曼荼羅」全8幅の中の第5幅で、もと法隆寺上宮王院北室の重宝であったとの墨書銘がある(図3-11)。図の左方に「擊鼓宣令、四方求法」(鼓を撃つて四方に宣令して法を求めき)とあり、その左岩山の中腹で薪を担ぐ人物、下で仙人に従う王がいて、楼上で鼓を打つ図に「即随仙人、供給所須」(即ち仙人に随つて所須を供給し)とあり、下方中央の旅姿で杖を突く2人物の上は「王聞仙言、歡喜踊躍」(王仙の^{ことば}言を聞き、歡喜踊躍し)とある。これらの言葉は上記提婆品の偈ではなく同品の前文に一致し、鐘でなく鼓とあつて(一般的に繡帳以外はこのような鼓の場合が多い)立本寺図も鼓を描いている。

6. 下段左部分 (図3-12)

ここでは左側の宮殿建築の中にいる5人の人物(92・96)と、右側の仏殿に注目したい。両建築は下方の縁の連続した様子(89,81)から、場面として繋がっていることが知られる。そこで、これをもとに検討してみよう。左の5人の人物のうち、持華の女性供養者(94)が中央に坐すことから、これを主人公としてみた場合、上記の提婆品の後半の物語である、龍女の即身成仏の一段として本図を理解することができると思われる。すなわち、釈尊が、多宝仏所従の智積に文殊の海中竜宮における『法華經』説法を明かし、これをうけて文殊が竜宮における龍女の篤心の娘、龍女の話をする。智積が信じかねていると、龍女が忽然と仏前に現われて、大乘を弘め衆生を救済すると誓う部分である⁴⁹。

図では、左方宮殿内で経箱と柄香炉を持つ男女2人の従者を従えて持華する、中央の女性

⁴⁷ 同上掲注 25,9-p.34c,「我念過去劫,為求大法故,雖作世国王,不貪五欲樂,椎鐘告四方,誰有大法者,若為我解説,身当為奴僕」の文。

⁴⁸ 同上掲注 25,上続き,「時有阿私仙,来自於大王,我有微妙法,世間所希有,若能修行者,吾当為汝説,時王聞仙言,心生大喜悅,即便随仙人,供給於所須,採薪及果瓜,隨時恭敬与」の文。

⁴⁹ 同上掲注 25,上,p.35c。

(94) が龍女であろう。そして右2人の僧(95,96)のうち、跪いて女性に話かける1人(95)が、本文で龍女と対論する舎利弗であろうか。提婆品ではさらに諸比丘への信を勧めるので、仏殿にいる5比丘(86,87)もその反映ではないかと思われる。

つぎに、舎利弗が龍女に女身の五障を説き、龍女が宝珠を取り出し、献納の速さより早く成仏する。成道した彼女は南方無垢世界で妙法を演説する。おそらく図の左右の連続性からみて、右手の仏殿(85)が成道を遂げた龍女が南方無垢世界で妙法を演説する場面であろう。理由は、仏殿の下部に連続する反花(88)が仏殿を含んで浮上させていること。また、上記立本寺の「法華経金字宝塔曼荼羅」(図3-13左上)や、建武2年(1335)に描かれた本興寺の「法華経曼荼羅」(図3-14中央)で、いずれも龍女成道の場面に仏殿を伴っていることが知られるからである。

第4節 まとめと展望

上記で述べた図像と『法華経』品々の関係をまとめると、およそ以下のようになる。

図 法華経 尊像

上段右	普賢菩薩勸発品第28	弥勒菩薩
上段左	薬王菩薩本事品第23	薬王菩薩
中段右	妙莊嚴王本事品第27	薬王(浄眼)、薬上(浄蔵)菩薩
中段左	観世音菩薩普門品第25	執金剛神(観音の化身)
下段右	提婆達多品第12	国王(釈尊)と仙人(提婆達多)
下段左	提婆達多品第12	龍女成仏

この特色は、上段と中段で示された薬王品23、観音品25、嚴王品27、普賢品28が、いずれも聖徳太子の『法華義疏』でも指摘する『法華経』の流通を明かす部分に相当すること、すなわち、この4品が後代へ『法華経』を弘めるという点で共通するという点である⁵⁰。これを具体的に当てはめると、橘妃が太子の往生後「憊因図像、欲観大王住生之状」(橘わくは図像に因り、大王の住生之状を観たてまつらんと欲^{おも}う)⁵¹と銘文に記すその後の様子は『法華経』の弘法の方規に即して表された可能性があると考えられることである。

そして、下段の国王の求法と、龍女の即身成仏は、いずれも在俗の人々の話であることから、在俗者の立場を重視していることがわかる。したがって、図の全体を合わせて考えると、橘大女郎が見たいと願望した天寿国繡帳の図像は、太子亡きあとの『法華経』の世界へ、橘大女郎たちも参加した状態で「法華経変相図」が描き表されたということであろう。

さて、上記繡帳下段(図3-10,12)で提婆品の関係が明らかにされたが、元来、聖徳太子の読んだ『法華経』は、彼の注釈した『法華義疏』によれば、提婆品を含まない羅什訳の27

⁵⁰ 聖徳太子『法華義疏』4,(『大正蔵』56,1929,p.124-127), 隋・智顛『法華文句』1上,(『大正蔵』34,1926,p.1c-2a)。

⁵¹ 上掲注1,『上宮聖徳法王帝説』p.46, 大橋書,上掲注7,(p.81,145)参照。

品本であった⁵²。したがって、提婆品を含む『添品法華』や、『妙法華』28品本が、わが国で何時受容され、図に描かれたかが問題となる。一方、羅什以前の竺法護訳の『正法華經』では、提婆品を含んでいるが、その相当部には「擊鼓振鐸」とあり、「槌鍾」や「椎鐘」との表現はない⁵³。したがって、繡帳は、『添品法華』か、唐本の『妙法華』28品本を基にしたと考えなければならない。石田茂作氏のまとめた「經疏目録」によれば⁵⁴、『正法華經』が天平3(731)年、『添品法華經』が天平15(743)年、唐『法華經』が天平17(745)年に写經されているので、当繡帳は、天平15(743)年以降が、今日確認できる確かな年代ということになる。

つぎに、繡帳図の様式的特徴が隋代に相当する点を指摘してみよう。敦煌莫高窟第303窟(隋窟)人字破東西の『法華經』觀音品・見宝塔品變相図には、繡帳下段に見える単層入母屋造の建物(73)や重層建築(84,91)が数多く描かれている。この壁画では、建物と建物の間に樹木(97)が植えてあるが、この点も類似している(図3-15)。第394窟(隋窟)西壁南側の菩薩像(図3-16)では、蓮華座の反花の蓮弁に円紋をあらわしており、繡帳下段左の建物下部に見える蓮弁(88)もこれと同じである。また、この壁画の左右に見える連珠文と繡帳下段の左右に見える連珠文(98,81,83)は、ほぼ同様式である。これは『法華經』序品の偈に「珠交露幔、宝鈴和鳴」(珠をもって交露せる幔あって、宝鈴和鳴せり)とあり、見宝塔品に「宝地平正、宝交露幔、偏覆其上」(宝地平正なり、宝をもって交露せる幔、^{あまね}偏く其上に覆い)とある表現に叶うものであろう⁵⁵。また、この菩薩像の蓮台を見ると、子房が曲がって出ているが、繡帳上段左右の菩薩はいずれも曲がった子房(9,27)の上に坐している。子房の長さに違いはあるが、様式的には一致する。子房の下の5葉の立蓮華(9,28)では、隋代とされる白鶴美術館の「鎚蝶五尊像」(図3-17)がこれに近い。ほかに、法隆寺の金堂本尊光背の化仏(図3-18)や、天蓋の飛天(図3-19)が立蓮華に坐しているほか、上掲の四十八体仏の台座が立蓮華である(図3-2)。また、繡帳の在俗の人々が多く蓮華を捧持する(2,3,4,6,7,69,94)が、これも上記第303窟はじめ、第62窟や第389窟、第390窟など隋代の敦煌壁画に見られる特色である(図3-20)。これは見宝塔品の、諸仏が釈尊に問訊するため遣わす侍者達の「各齊宝華満掬」(各の宝華を^も齊ち^{もろて}掬に満てて)とある様子を彷彿とさせるものであろう⁵⁶。

以上、天寿国繡帳が様式的に隋代に一致する点を指摘した。これが聖徳太子による遣隋使の将来した当時の時代様式であれば、繡帳の推古朝制作説の可能性も十分にあると言える。

⁵² 上掲注50、『大正蔵』56,p.64-127。

⁵³ 上掲注25、『大正蔵』9,p.105b。

⁵⁴ 石田茂作『写經より見たる奈良朝仏教の研究』(東洋文庫,1930),經疏目録,p.31。『正法華』天平3年は東京帝国大学史料編纂所『大日本古文書』1,1903,p.443,『添品妙法華』天平15年は同8,p.222,『唐法華』天平17年は同8,p.577。

⁵⁵ 上掲注25、『大正蔵』9,p.3b および p.33a-b。

⁵⁶ 同上掲注25,p.33b。

しかし、乗り越えるべきハードルは、まだ幾つか残されているように思われる。たとえば、文献的に天平年代を遡らないという、上記の結果生じた空白期の問題を解決しなければならないこと、また飛鳥、白鳳期の作例で比較してみる必要もあろう。あるいは新旧2張の混在で平安、鎌倉期までを視野に入れて勘案してみることなど、これらは今後さらに検討しなければならない問題点である。